



2005年

**SORA** 12号

晴夜 (12) — 2

柴田 佐知子

志摩町五句

石斧石鏟支石墓そして大刈田

塩つくる火を冬濤の前に守る

塩つくる男に冬の海高し

杉の実や年寄りに神高すぎて

茶屋

断崖を真直ぐ落とす冬の空

萩括るとき両腕の長くなる

荒々と軍鶏の目のある神の留守

月光の屋根反る寺の浮き上る

柿ちぎる落ちたる人の話して

## 海鳴り

荒井千佐代

軍艦の出で入りしづか黍嵐

書道塾の昼の灯ふうせんかづらかな

錆ふかむ陸の碇や草の花

泣きやみし赤子に大き月出づる

新涼や深き息してマリアの前

音もなく厄日の雨や逢うてをり



萌

衣被どうでもよきことひきずりて

入院のリユツクひとつや雁渡し

サーカスの去りて背高泡立草

秋薔薇に鋏おろして祝婚日

父母亡くてたちまち秋の深みけり

茶の花や沖まで遠目きく日なり

舟底の貝がら剥がす鴟日和

ざざ降りのあふれて蕪抜きし穴

海鳴りに茶の葉ふるへみたりけり

# 九州大学

青山 悠

門標に九州大学小鳥来る

橡の実や早き灯の入る守衛室

キャンパスに月光の樹々そして塚

円座組む野球部員や秋高し

初鷗や移転はじまる工学部

色変へぬ松や明治の赤煉瓦



金の実のからたち垣も実習園

桑括る畦に元寇防塁碑

猫車伏せて秋ゆく農学部

黄落やゆつくり廻る風見鶏

落葉踏む教授の大き革靴

秋風や迷彩残る一校舎

航空路直下の学府寒波来る

くろがねの碇七艘枯るる中

冬麗や宇宙飛行士の母校

# 列 島

秋 千 晴

夏蜜柑買ひにぶらりと島へ行く

慎ましき女ばかりや紫蘇の花

仰向けの蟬の時折動きをり

水を打つをんなの胸の揺れてをり

茶会

ががんぼのやうな外人躰り入る

草刈の腰曲げしまま夫戻る





秋暑し列島歪め総選挙

演説の眼鏡ずれたる残暑かな

厚く剥かれし林檎に毒があるやうな

新米の旗も新し軒を出て

近づけば米塚芒ばかりなり

猪の竿を歪めて吊られけり

初柿のごまの数だけ夫頑固

手折らるるまへの鶏頭種こぼす

紋刻む稻刈鎌の家長なり

## 花野

あさなが捷

蝉時雨の中に一人ゐてひとり

手の冷えや悲しみはまつすぐに来る

明日できることはあしたに白木槿

コスモスのまん中にゐて空ばかり

一病にて息災といふ鱗雲

萩の野にたぶらかされてしまひさう



敬老日母の顔見て入院す

入院の車追ひくる曼珠沙華

夕食におはぎの乗りし入院日

白き部屋に目覚めて声の暖かし

見舞はれし花束小さき花野と思ふ

手術痕包んでゐたる冬帽子

秋の雨何もせずとも一と日過ぐ

三食をきつちり食べて月を見る

与へられし命なりけり神有月